

白 河 南 殿 跡

文化庁国庫補助事業による六勝寺関連の発掘調査の概要

1979年度

京 都 市 文 化 観 光 局
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺 構	2
III	出土遺物	2
IV	ま と め	2

〔図・写真〕	1	調査位置図
	2	遺構平面図
	3	壁面図
	4	調査地全景

I 調査に至る経過

京都市左京区聖護院蓮華藏町1の25の中沢忠嗣氏が新築工事の計画を立てられた。当該地は六勝寺跡の一郭を占める白河南殿跡に比定される重要な地域の為、京都市文化財保護課の指導により、事前に発掘調査を行い、遺跡の遺存状態を調べるようになった。その為、京都市文化財保護課は京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託した。

発掘調査は、1979年8月4日に開始し、同月25日に終了した。調査トレンチは、工事区167㎡のうち、南側が既存建物の基礎により著しく破壊されているため、北側に東西約13m、南北3mの長方形グリッドである。

また、発掘調査にあたり、地主の中沢忠嗣、京都市文化財保護課槻川敏夫の各氏に終始御配慮いただいた。

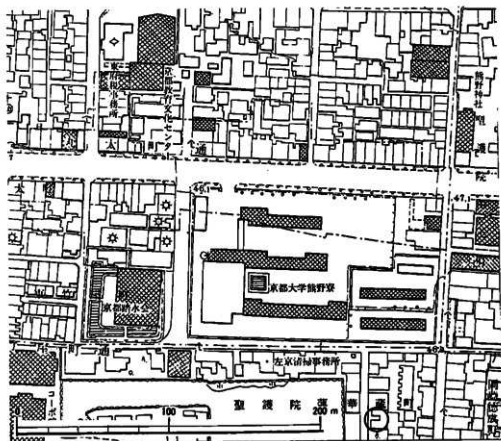


図1 調査位置図

II 遺 構

トレンチの現地表下より約1.1mから2mは現近代の整地層のため機械により除去した。それ以下は、トレンチの大部分を近世以降の遺構である井戸、溝状遺構、土壇などが占め、東端部において、一部厚さ10cmの淡茶灰色砂泥の遺物包含層が認められた。遺物はごく少片の土師器だけで時期は不明である。今回の調査において平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は、遺物包含層が残存していたトレンチ東端部で検出した土壇だけである。

土壇

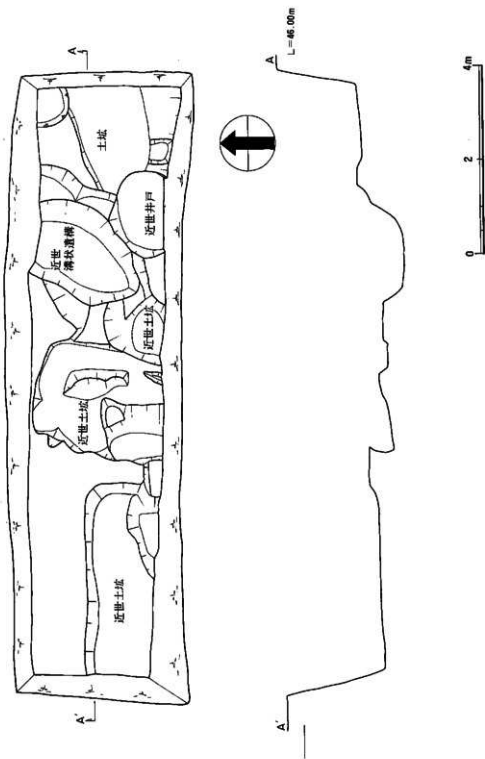
トレンチの東端にて一部確認した土壇状遺構である。全様は不明で、西肩部も近世以降の井戸及び溝状遺構により切られているが、東西2.3m以上、南北2.2m以上、深さ80cmのやや円形を呈する土壇である。埋土はほぼ2層に分層でき、上層は茶灰色砂泥で、少量の土師器、瓦を含む。下層は淡灰色泥砂で多量の瓦(軒丸瓦、軒平瓦を含む)、土師器、瓦質鍋、陶器片を含む。

III 出土遺物

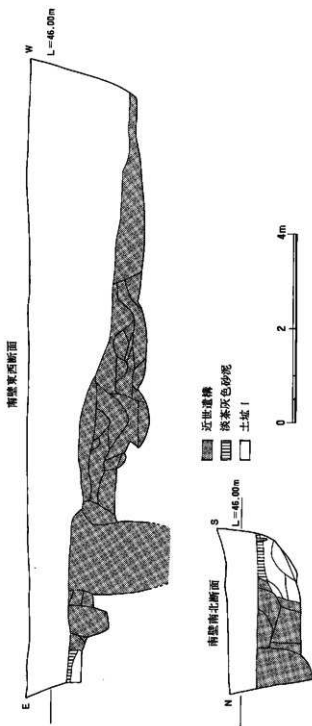
出土遺物の総量はコンテナ42箱であるが、このうち大部分を近世陶磁器、土師器などが占める。その他は、土壇より出土した瓦類、土師器、瓦質鍋、陶器片である。瓦は、すべて平安後期に属する。

IV ま と め

今回の調査においては、トレンチの大部分を近世以降の遺構により削平され、それ以前の遺構はほとんど残存していなかった。平安後期の土壇を1つだけ確認したにとどまる。そのため、白河南殿に関連する明確な遺構は判明しなかったが、当該地において平安後期の遺構が確実に存在したことは発掘調査の貴重な成果といえよう。



遺構平面図





調査地全景

白河南殿跡(1979年度)

文化庁国庫補助による六勝寺関連の発掘調査の概要

発行日 1980年3月31日

調査主体 京都市文化観光局

発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
編集 TEL(075)415-0521

印刷 真 陽 社